世界詩人全集

17

アポリネール
コクトー詩集
シュペルヴィエル

渡辺一民　堀口大學　飯島耕一　訳

新潮社

世界詩人全集 17

アポリネール
コクトー
シュペルヴィエル 詩集

昭和四十三年七月十五日印刷
昭和四十三年七月二十日発行

価五〇〇円

訳者 渡辺一民
堀口大學
飯島耕一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話(260)二一一一 振替東京八〇八
郵便番号一六二

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿 加藤製本所
(乱丁、落丁本はおとりかえいたします)

〈第10回配本〉

© K. Watanabe, D. Horiguchi & K. Iijima 1968, Printed in Japan.

目次

アポリネール
アルコール
地帯
ミラボー橋
○愛されぬ男の歌
白い雪
○るつぼ
ラインの夜
○女たち
病める秋
カリグラム
窓
丘
小さな自動車
露営の火
騎兵のわかれ
赤毛の女
○ある
夢判断

九 一二 一四 一四 一四 一四 一五 一五 一五 一六 一六 一六 一八 一八 一八 一九 一九 二〇

コクトー
詩集一九一七～一九二〇
マリー・ローランサン　一〇一
言葉の放列　一〇三
港　一〇六
正午　一〇七
踊子　一〇八
耳　一〇九
無韻詩　一一〇
言い回し　一一一
かわいそうなジャン　一一三
オリーヴの木を賛める　一一五
おせじ　一一六
寄港地
帆船　一一七
五月の朝　一一七
山鳩　一一八
よいもの　一一九
黒人と美女　一二〇
ユリシスの一党　一二一
オルタンス　一二二
落書　一二三
少年水夫　一二三
手風琴　一二四
黒奴美人　一二五
蠅　一二五
ホームシック　一二六
うろこ雲　一二七
いい気候　一二七
用語集
ヴェスピアス　一二九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

現行犯 一三〇
海水浴場トルーヴィル 一三〇
手風琴 一三一
夜半 一三三
銀髪も、若々しさが戴くと…… 一三三
天使の背中 一三四
犬は近くで吠え…… 一三五
三十になった詩人 一三六
サフォの墓 一三九
ソクラテスの墓 一四一
ナルシスの墓 一四二
或る川の墓 一四三
ドン・ファンの墓 一四三
アルキビアデスの犬の墓 一四四
朝の鐘 一四五
武具飾 一四五
奇蹟 一四六
村へきた天使ガブリエル 一四七
平調曲
時間という…… 一四九
絶えず文なしの…… 一五一
やがてして後世が…… 一五三
僕は眠りたくない…… 一五三
たよりない伴侶…… 一五五
恋のベッドよ…… 一五六
眠る顔の上の…… 一五七
僕らの恋の組紐は…… 一五八
ばらの花びらそっくりの…… 一五九
正直に僕は信じて…… 一六〇
この集の …… 一六一
人の気になぞ…… 一六二

オペラ
胸像 一六四
ギリシャ劇 一六五
青い錨亭 一六六
マルタンガル 一六七
No man's land 一六八
睡眠者のモデル 一六九
ひとかどい 一七〇
塑像に落書きする危険 一七二
寓意詩 一七三
旅中作 一七四
幽明集
一人一党 一七五
つまらぬ硝子の…… 一七六
睡眠と死とが…… 一七七
逝ったみたいな…… 一七八
道は短い…… 一七九
かつては睡眠を…… 一八〇
君は信じた 一八一
枝先に…… 一八二
嘲けられ 一八三
あの当時 一八四
人は出て 一八五
残念だ 一八七
生きていれば 一八八
拭かずに置く 一八九
若い女 一九〇
部屋 一九一
せんたく 一九二

シュペルヴィエル
悲しきユーモアの詩
詩人には親切にするがいい
おまえは同情過多症で……
一九七
一九八
船着場
耕しながら……
エスタンシアに帰る
牛飼い
サン・ベルナルディノ
二〇〇
二〇三
二〇六
二一〇
引力
幽霊
動作
巡回路
一つの声が言う……
二一三
二一四
二一五
二一六
昨日と今日
炎の尖端
沖の下
火事だ！
二一七
二一七
二一〇
二一三
無罪の囚人
囚人
心臓
山と岩、熱狂の記念物よ
しばらく一人で……
オロロン＝サント＝マリー
断末魔のささやき
生きているのか死んでいるのか
嘆願書
隣の部屋
きみは罪をくやむ
神なしに
二一七
二二七九
二四〇
二四七
二四八
二四九
二五一
二五三
二五五

彼にやりたいものだ　二五九
カルナヴァレ博物館　二六〇
灰色のシナの牛が……　二六四
太陽が小声で　二六五
森のなかで　二六六
眠った湖　二六七

未知の友だち

熊　二六八
ぼくの弟たちが……　二七〇
リカルド・グイラルデスにとり巻かれた家　二七一
場所をゆずる　二七三

忘れやすい記憶

ソネット　二七五
詩人フリオ・エレーラ……　二七七

悲劇的肉体

男が一人あっちへこっちへ　二八一
フィナーレ　二八三
フランスにとどまっている……　二八三

☆

解説　二八五
年譜　二〇九

アポリネール詩集

渡辺一民訳

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

詩集『アルコール』　Alcools

地帯

ついにおまえはこの古びた世界に飽きたのだ
羊飼いの娘よ　おお　エッフェル塔　今朝　橋のむれがめえええと声をふるわせ
おまえはギリシア　ローマの古代のうちに　生きることなどまっぴらか
ここは自動車までが古色蒼然として
あたらしさを失わないのは宗教だけだ
それは空港の格納庫さながら純潔をたもち

ヨーロッパではおまえひとりが古代ではない　おお　キリスト教よ
ヨーロッパ一の近代人　法王ピオ十世　それはあなたのことなのです
そうしてどの窓も見まもっていたから羞らいがひきとめたのだ
おまえがけさ懺悔しようと教会にゆくのを
おまえの読んでいるちらしやカタログやポスターが声はりあげて歌いつづけ
そいつらこそ今朝の詩だ　そして散文には新聞がある
推理小説と名士の顔と色とりどりな見出しを
満載した二十五サンチームの週刊紙がある

わたしは見た　今朝　その名を忘れてしまった美しい街を
清潔でさわやかな　それは太陽のラッパ手だった
この街を日に四たび　月曜の朝から土曜の夕暮まで
とおりすぎる重役や労働者やきれいなタイピストたち
午前に三たび　この街にサイレンがうめき
真昼どき　気みじかな鐘の音がさわぎたてる

鸚鵡(おうむ)をまねてわめきやめない
看板や壁のゴチック文字にナンバー札に掲示板
オーモン＝ティエヴィール街とテルヌ通りにはさまれた
わたしは好きなのだ　パリのこのオフィス街のやさしさが

これこそ青春の街　そしておまえはまだあどけなく
母の好みで青と白の洋服ばかりを着せられて
敬虔なおまえと幼な友達のルネ・ダリーズと二人にとって
教会の壮麗さほどすばらしいものはこの世になかった
九時　ガス燈がほそく蒼ざめる時刻　二人はこっそりと寝室をぬけだし
学校の礼拝堂で夜を徹して祈ったものだ
だがふたたびめぐりくることもあるまい　紫水晶よ
頌(ほめ)むべき永遠の深奥なるもの　キリストの燃えあがる栄光も
いまわたしらみなの願うもの　それは美しい百合の花
風すらも吹きけさぬ褐色の髪毛たばねた松明(たいまつ)のあかり
苦悶の母が生みおとす蒼ざめて真紅の頬した人の子
またそれは　あらゆる祈りが枯れもせずしげる大樹

栄誉と永遠の二つながらの処刑台
六つの光芒にかがやく星だ
それは金曜日に殺されようと日曜日によみがえりたもう神
飛行士よりも巧みに蒼穹を昇天するキリストなのだ
かれは高度の世界記録をうちたてた

瞳よ　まなこ輝くキリストよ
諸世紀の二十番目の瞳　かれはそのつとめをすでに知り
鳥となったかれ　世紀は蒼天をイエスのように翔けのぼる
奈落のふちに悪魔らはかれを見あげて口ぐちに
まねているのだ　ユダヤの魔術師シモン[1]のやつを
それから声をあらげて　飛行するなら泥棒とよぶぞ
とはいえ天使は美しい鳥人をめぐって空に舞い
イカルス[2]とエノク[3]、エリヤとテュアナのアポロニオス[4]が[5]
はじめての飛行機によりそって中空にうかぶ
聖体を捧げもつひとびとは　聖体のパンをいただき永遠に昇りつづける司祭らに

1　サマリアの魔術使。『使徒行伝』八章十八節参照。
2　ギリシア神話中の人物。翼をつくり空を飛んだ。
3　旧約聖書中の人物。『創世紀』五章、十四章、十五章参照。

身をひるがえして　ときおり道をゆずるとはいえ
そのとき蒼穹はおびただしい燕たちにみちあふれ
けたたましい羽搏きとともに鴉と鷹とふくろうのむれが
アフリカをあとにした桃花鳥(ピンス)と紅鶴と鵠鶴(こうづる)たちがきた
古老や詩人のかたり伝える　巨大なあのロック鳥[6]は
人類最初のこうべ　アダムの頭蓋(ずがい)に爪たてて輪をえがき
鷲はひとこと鋭くさけび地平からまっしぐらに
アメリカから虫かと見まごう蜂雀が
シナからは翼をつらねてかろやかな
ながい隻翼の連理の鳥ピースがきた
それから琴鳥とまんだら模様の孔雀にまもられ
汚れなき神霊のしるし　あの鳩が
おのれを生む　あの火刑台の不死鳥も
その灼熱の灰に　一瞬　万物が埋もれはしたが
セイレネス[7]たちも怖ろしい海峡をあとに
三人ながら魅惑の歌をうたいながら
そうして　だれもが空とぶ機械とむつみあった

4　旧約聖書中の予言者。火の馬にひかれた火の車で天に昇った。『列王紀略・上』十七～二十二章『列王紀略・下』一～二章参照。
5　ギリシアの哲学者。魔術師とも伝えられる。
6　アラビアの奥地に住むと伝えられる巨大な怪鳥。
7　大海の小島に住む魔女。乙女の顔、鳥の姿をして、その歌声で舟人をひきよせ殺したと伝えられる。

鷲も　不死鳥も　シナからきた比翼の鳥ピースも

いまおまえはただひとりパリの群衆のなかをさまよう
バスのむれは唸りつつおまえのかたわらを走りすぎ
愛の苦しみがしめつけるのだ　おまえの喉を
もうけっして愛されてはならぬとでもいうように
古びた時代に生きるなら修道院も悪くはあるまい
だがおまえらは　ふと口をつく祈りもふかく恥じている
おまえはおのれをあざ笑い地獄の業火さながらにおまえの笑いははぜるのだ
その笑いの火花こそ　おまえの生命（いのち）のいしずえを金色にかざりたて
それは暗い美術館に陳列された一枚の絵だ
おまえはときどきそばまでいって　その絵をじっと眺めている

今日おまえはパリをさまよい女たちは血ぬられている
思いだすまい　それがむかし美の凋落のしるしだったと

その数は二人とも三人とも
いわれる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo